

本日からアドベント（主の御降誕を待ち望む、主の再臨を待ち望む時）に入ります。主の御降誕への感謝と救いの完成の主の再臨への希望をもって歩みましょう。

コロサイ人への手紙の緒論

1. 著者：パウロ。1：1、23、4：18。
2. 執筆年代：AD61年頃。
3. 執筆場所：エペソ、ピリピ、ピレモンへの手紙と同様に、パウロのローマにおける第一回の獄中生活の間に書かれた。
4. 執筆事情：コロサイ教会には、異端的な教え、ユダヤ教的教えが入り、福音の純正さと教会の平和を腐食しつつあったため、それを是正し、福音の正しい理解に立った信仰生活と教会形成を教え諭すため書かれた。
5. あて先：コロサイ。小さな町。パウロはこの教会を訪問したことはない。1：4、2：1。パウロ自身がコロサイの教会を建設したのではなく、ある期間パウロの監督下で奉仕していたコロサイ出身のエパfras（1：7）の手によって始められたと思われる。

挨拶の中にある恵み→

I 「神のみこころによる（この使徒職が決して、自分からのものではなく、神の恵み、選び、みこころ。神に選ばれていない異端の偽教師たちとは違う）キリスト・イエスの使徒（神に選ばれ、使命と使信とを委ねられて遣わされた者、神の代弁をする大使）パウロと兄弟テモテ（彼は第2回伝道旅行の際、ルステラでパウロに見出され、使徒16：2、その後伝道者としての訓練を受けていた。パウロは単独で働き孤立するのではなく、同労者を大切にした）から」：1。私たちも、神のみこころ、恵みにより、救われ、証し人として世に遣わされている。「コロサイにいる聖徒たち、キリストにある忠実な兄弟たちへ」：2→コロサイは小さな町だった。しかし、異教と偶像の圧力は、小さくなかった。コロサイのキリスト者は、少数派の劣等感や偏狭性のとりこになりやすかったと想像されます。そのような彼らを「聖徒」と呼んだのは意味深い。聖徒という呼称は、聖化の度合いのことではなく、信仰者の身分、位置を表す。これは、神の目的を担うため、神から選別された旧約のイスラエルを背景として、それから由来したもの→「主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた」（申7：6）。私たちも。「あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、きよい国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光（救いの光）の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」（Iペテ2：9）。聖徒という呼称は、小アジアの片隅で苦闘するコロサイの信徒に、実に自分たちが神の天上的な召命によって、選び分かれた神の民という厳粛な恵みの事実を銘記させる。私たちも。「聖徒」が神との縦の関係を強調すれば、続く「兄弟たち」は、キリスト者同士の横の連帯、彼らが主にあって一つの霊的な神の家族に連なる者であることを示す。私たちは、①神とのつながり、そして②主にある互いのつながり、交わりの両方が大切です。「忠実な」→自分勝手、自分の思いつきではなく、主に忠実な。「主がモーセに命じられたとおりに」幕屋建設をした民のように（出39、40章）。「キリストにある」→キリストとキリスト者との神秘的霊的結合を表す。「キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同（イスラエル人と）の相続人となり、ともに一つのからだ（キリストの教会）に連なり、ともに約束にあずかる」（エペソ3：6）。

II 「私たちの父なる神から」：2。神の御子を信じると私たちは神の子とされ、わたしたちは互いに兄弟姉妹であり、偉大な神が私たちの父となられる。旧約時代の祈りの神への呼びかけ＝「わが神よ」「神よ」「主

よ」。私たちの「父よ」ではない。しかし新約時代は→主の祈り「天にいます私たちの父よ」。天地万物の創造主、偉大な神が小さな私たちの父となられるとは驚くべき恵み！世界で最も素晴らしい私たちの父は、全能、永遠（途中で私たちを捨て、父でなくなる方ではない）永久にほむべき聖なる方、子とされた私たちのことをすべて知っていてくださる。私たちが自分のことを知っている以上に完璧に知っておられる。私たちの父なる神は、神の子である私たちに何が益（ローマ8：28）であるかご存知。私たちの思いと違うことも起きたり、試練や豊かな赦しが与えられます。「主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから。わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ」イザヤ55：7，8。全能の父は、聖なる愛をもって私たちを見つめ、私たちのあらゆる必要を知っていて下さる。私たちに真に必要なものとは与えず、真に必要なものを与えて下さるので、かえって心から正直に祈り求めることができる。また神は私たちが正直に祈り求めることを、その交わりを喜ばれる。御父は、私たちの嘆き、かすかな溜息も聞き分け、永遠の愛をもって愛して下さる。私たちの父なる神が、一番望んでおられるのは、私たちの祝福、幸い。さらに父なる神は「私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方」（エペ3：20）であることを思い起こして祈ろう。私たちが願うよりもはるかに勝って私たちを祝福したいと切望されている。「主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であられるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は」（イザ30：18）。

Ⅲ「恵みと平安が…ありますように」：2。

1. 「恵み」＝神の一方的な好意。神が御子を救い主として送られた（クリスマスの）恵み。出エジプト記や旧約聖書が指し示す贖い（私たちの罪の償い、滅びから買い戻してください）を主がクリスマス・十字架・復活で成就された恵み。罪の赦し、永遠のいのちの恵み。神に愛される恵み。常に神の恵みが先。「平安と恵み」という順序はない。神の恵みがあって初めて平安が生まれます。神の先行的恵み（クリスマス・十字架・復活・インマヌエル＝神は私たちとともにおられる恵み）がなければ、私たちの救いはなく、すでに滅び失せている→「『私は待ち望む。主の恵みを。』 実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみは尽きないからだ」哀歌3：21，22。私は、いつもこの驚く恵みを思い感謝しています。

2. 「平安（原語：平和、和睦、平安）」。神の恵みによって与えられる平安。三つの祝福

①神に敵対していた私たちのために神のほうから救い主の誕生・御子の十字架を用意し、罪の赦しによる神との和解、平和を与えて下さる。

②神に赦され神と和解できた私たちの心の中にこの世にない真の平安、安らぎ、安心感を与えてくださる。「わたしの平安を与えます。私は、世が与えるのと同じように与えません」ヨハネ14：27。※証し。神が赦し受け入れられた自分を自分でも赦し受け入れる自分との和解から生まれる平安。

③私たちお互いの間に平和を造り出してください。平和の主が私たちの間におられなければ、赦し合い受け入れ合うことは難しい。違いと人格を区別できず、意見の違う人と関係を続けられない。敵対する人が多かったパウロがこう挨拶し祈ることができたのは、彼自身が獄中にいても、敵対する人がいても赦し、どんな境遇にも左右されない御父からの恵みと平安をいただいていたから。私たちもまず自分自身が御父からの恵みと平安を求め、いただき続け、「どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように」と心から祈る者とされたい。主が新来会者を私たちの主の教会に導かれて、教会に神の恵みと平安が満ちていれば、主を信じる人、教会に加入する方々が与えられ続けるでしょう。神を賛美し、いのちのみことばが語られる礼拝こそ「宣教と成長」の恵みの場です！ 応答の賛美、「ひとりの御子を」をもって神を心から賛美しましょう。

祈り：救い主による恵みと平安を感謝します。